

巻頭言

そうだ、チャペルに行こう…

立教大学チャプレン 斎藤 徹

「すべて重荷を負って苦勞している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。私は柔和で心のへりくだった者だから、私の軛くびきを負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂こゝろに安らぎが得られる。私の軛くびきは負いやすく、私の荷は軽いからである。」

(マタイによる福音書第 11 章 28 - 30 節)

私が働かせていただいている教会の礼拝堂は、聖別されてから 94 年になりました。旧浦和市で最初の鉄筋コンクリート建造物といわれる礼拝堂は、現在も人びとの祈りの家として用いられています。

礼拝堂に入り、ひとり静かな時間を過ごしていると、さまざまな事が心に浮かんできます。日曜日の礼拝、子どもたちとささげた祈り、喜びのうちに広がった笑顔、悲しみの中で流されたたくさんの涙、会話の中で心を交わしたひと時、先輩聖職者が示してくれた「背中」。心に浮かぶそれぞれの場面には人がいて、その交わりの中で生かされてきたとの思いに至ります。誰かに想われ、祈られて生きてきたという温もりが、心に湧いてくるのです。

ふと目を上げてみると、趣があって歴史を感じさせる祭壇、リードオルガン、梁や壁、扉や床には、この礼拝堂でささげられてきた祈りが染み込んでいるように見えます。そのとき、はるか昔から今に至るまで、人びとの想いや祈りを、人と人との間を繋がれてきた神を思わされるのです。礼拝堂には神と人に心を寄せてきた人びとの息づかいが確かに残されています。

不思議なもので、礼拝堂にひとり静かに座してみると、背負っている重荷が軽くなっていくような心地がすることが多々あるのです。それがなぜなのかははっきりとは分かりませんが、想われて

祈られて生きていることを、心が思い出すからかもしれません。

独りだと思うとき、自分だけで頑張っているとき、背負うものはどんどん大きく重くなっていきます。だけど自分というものが独りでないと思えるとき、そのことを心が思い出すとき、背負っているものはどんどん小さく軽くなっていきます。

子どもの頃、祈りとは神とのナイショ話だと教えられたことがあります。誰にも聞かれずに思いを吐露できる、心配で仕方がないことを投げかけることができる。祈りとは、心を神に寄りかけること、独りで背負う重荷が、神と共に背負う軽い軛くびきに替えられていくことだと、私は考えています。

立教学院は創立 148 周年を迎えました。この長い歴史にはいつも祈りが伴ってきました。それは立教が人を想って祈りをささげてきた歩みであり、そして神に信頼して寄りかかってきた歴史でもあります。そこに生きてきた人びとの祈りが、立教には染み込んでいます。そして今も日々祈りが響いています。

ふとした時に、ぜひチャペルに入り静かに佇み、心を自由にしてみてください。そこでは神の想いと人の祈りに包まれてきた立教の息づかいが、あなたを生かしてきた温もりがあなたを包み、負っている重荷が独りのものではなく、共に担ってくれる軛くびきに替えられていくような思いを経験されるかもしれません。

「そうだ、チャペルに行こう・・・」

誰に気兼ねすることもありません。だって祈りは、あなたと神さまだけのナイショ話。心の荷物をおろして休むとき。チャペルはそのための場所なのであります。